



# 自分を変身させて みましようよ!!

## 防災ボランティア立ち上げに参加して

### 第二の人生は違う自分に!!

読者の中にもいらっしゃる地方公務員  
OB、OGの方は長い間、組織の一員として  
大きな責任を持ち、厳しい局面や辛い立場など  
様々なご苦労を重ねてこられたと思います。  
長い間お疲れ様でした。私も同じでしたね。  
長年勤めていると、人の評価に対して固  
定観念が貼りつき、なかなか脱皮できない  
ものです。でも、定年後は、思い切って自  
分の評価を変えるようにして、違う自分を  
見つけてみましようよ!! 必ずやどなたで  
も、それを見つけて、違う世界へと入って  
いけるのではないのでしょうか。私もそれを見  
つけようとしている途中ですから。

### 私の居住地

北海道十勝平野

私は北海道の広尾町という町に住ん

でいます。十勝平野の太平洋沿いにあり、  
森進一の『襟裳岬』で歌われたえりも町の  
隣りに位置しています。人口は約7000人  
です。

十勝地方は西に日高山脈が連なり、北に  
は雪を頂く大雪山系を臨み、南には太平洋  
が青く広がり、機械化のためにトラクター  
が転倒しないように平らにした畑が広が  
る、広大で真つ平らな地帯です。ここに、  
19市町村が南北約200km、東西約100  
kmにわたり点在している大平野なんです。  
隣町へ行くのも遠いため、居住地外の方々  
と親交するのが難しい所です。

### 今までの自信のなかった自分

実は子供の頃に苦い思い出があるんで  
す。それは、小学校での体育の時間。鉄棒  
の逆上がりが何回やってもできませんでし  
た。それまで、体育やスポーツを特に意識



青木 達彌

とかち防災マスターネットワーク顧問

【あおき・たつや】

1946年、札幌市出身。民間建築会社を經  
て1973年広尾町役場に奉職。建設課長、消  
防本部消防長、代表監査委員などを歴任。  
2003年消防大学校上級幹部科修了。2007  
年から「とかち防災マスターネットワーク」  
代表。2016年同ネットワーク顧問。

していません。十勝平野の太平洋沿いにあり、  
森進一の『襟裳岬』で歌われたえりも町の  
隣りに位置しています。人口は約7000人  
です。

そんなこともあり、他の勉強はともか  
く、体育を頑張ろうという気持ちは起きま  
せんでした。「両親も運動音痴だらうし」と、  
勝手に原因を親に転嫁したりして…。

しかし、その後びっくりすることがあつ  
たんです。それは高校時代、遠く離れた町  
の友人宅へ遊びに行った時のことです。知  
らない町を友人と散歩していたら、広場で  
若い人たちがソフトボールの試合をしてい  
ました。何気なくしばらく見ていたら「一  
緒にやってみないかい? 打ってごらん」  
と声をかけられたのです。

私はためらいましたが、知らない町です  
し、やってみようと、バッターボックスに入  
り構えると、相手投手が「大きい人だな!



今年2月北海道様似町で開催された防災講習会で、活動内容を説明する青木さん

当たればでかいから外野はバック！」と叫びました。何だかジャイアンツの強打者にもなったみたいで嬉しくなり、体の底から理由のわからない自信が湧いてきました。何球目かの球を思いっきり振ると、何とバットに当たり空高く飛んでいくではありませんか。打った自分が一番びっくりしていると、周りから「一塁へ走るんだよ！」と言われ走り出すと、球は外野手の上を超えて飛んでいったようで三塁打となりました。この思いがけない成功のおかげで、自分の前途に小さな希望を持つことができました。「もつと小さい頃に、能力がないわけではないと気づいていれば、その後の人生も変わったのかも」と勝手に想像していました。

### そしてオイルショックで公務員に

高校時代に新しい自分の片鱗を見つけたような気がしましたが、卒業後、民間企業を経て役場の建築職員となつてからは、またしても引つ込み思案な自分が少しずつ出てきました。周囲からは、「真面目で堅いが、融通がきかず面白くない！」などといったレッテルが背中やあちこちに、有り難くも貼られるようになりました。

そうなると開き直り、レッテル通りのような人間になり、悪循環に陥つていききました。私は「なんて陰気な町と職場なんだろう」と原因を他に求めていました。

長年、同じ職場や地域にいと、最初のレッテルが何十年経つても貼られたままで、自分で取り去るのが容易ではないのですね。そんな時は環境が変われば違う自分になれるのかどうかトレーニングをするのも、一つの方法ではないでしょうか。

### 「とかち防災マスター」とは何ぞや？

「北海道地域防災マスター」の制度は、北海道庁が平成18年頃から始めたものです。私にとつて当時は退職が近い頃でしたから、「そのうち何かの役に立てば」と思い、北海道地域防災マスターの資格を取りました。

これは各地域の防災リーダーや独自に防災の勉強をしたい人たちに講習会を受け

てもらい、防災マスターとして認定するものです。個人を対象としていて、組織化して行動を起こす必要など当初ありませんでした。個々に行動し勉強しなさいということですね。

退職後、私は「各市町村に分散している防災マスター希望者を集約して組織化する」との話を聞きました。その後しばらくして、組織化を考えている方から私に声がかかりました。「組織化に賛同する方々と、一度、意見交換をしてみませんか」とのお話でした。私は「どんな人が集まるのだろうか？」と興味を持ちました。

道の機関である十勝振興局の会議室へと呼ばれて行くと、5名が集まっていました。メンバーは、私の知り合いの消防機関のトップ経験者の男性（通称…プロフェッサー）、郵便局の男性（通称…ダンディ）、学校関係団体の女性（通称…美女）とセミプロ並みの歌唱力を持つ女性消防団の女性（通称…プリマドンナ）と私です。

はじめはどう話していいのかかわからず、やや、ぎこちなかったのですが、防災の話をしていくうちに、それぞれの明るい個性が出てきました。皆にぎやかで面白く楽しそうな人ばかりでした。もちろん、この方々は私の背中のレッテルはご存知ありませんから、私も気楽に楽しく冗談交じりに、積極的な考え方を思いっきり前向きに発言していました。

誰が一番先に言ったのか忘れましたが、

「ここに集まった皆で団結してみよう」との提案があり、防災マスターの組織として「とかち防災マスターネットワーク」が誕生しました。最初の5名が設立メンバーとなり、その代表を私が務めることになりました。

まずは「災害その他に関する難しい勉強をするよりも、災害の勉強が絡んだ、楽しい、為になる遊びを、たくさんの人に声をかけてやってみよう」ということになりました。それを段々と発展させ、私も資格認定された防災士並みの知識を身につけました。

メンバーのうち元気一杯なのは、パワフルな女性幹事2名です。プリマドンナが手を挙げて発言しました。「今度の夏に、帯広市の繁華街で車道を通行止めにしてお祭りのような歩行者天国をやるから、私たちもそれに出しましょう。テントを張って、その中で災害グッズの展示や、避難所での炊き出し訓練として豚汁でも作って楽しもうよ!!」と面白そうな提案です。早速、このアイデアに美女も「やろう! やろう!」と同調して、当然男性陣も全員大賛成してお祭り騒ぎを行うことにしました。

ですが、我が団体は決まった予算のない貧乏所帯で、食材、テントやテーブル、いす、鍋釜などの道具を、いかに経費をかけず調達・準備するかと案じました。プロフエッサーとダンディに相談しましたが、幹事の方々は大物ぞろいで「お金をかけない

で、借りられるものは借りよう。もらえるものは、もらおうよ!!」と明るく気楽に提案されるので、「それもそうだなあ。貧乏所帯なんだから堂々と借りようか」と私も腹を決めました。

貸してくれそうな所を当たっていくと、何とか借りることができました。食材などは農家にお願いで、分けてもらいました。足りない分は、男性幹事が自分たちの少ないおこづかいの中から持ち寄りです。

ここで、私たちの活動の一端をご紹介いたしますと、一番多いのは役所や病院、町内会から依頼される防災関連の講習会での講師です。「避難する場合の行動は？」ですとか「応急手当法」「災害時の対応講話」などについてお話しします。

このような講習会に参加される町内の方々はとても熱心に聞いてくれますが、一方で独自の意見を持つ方も多いので、時には口げんかになることもあり、仲裁に困ってしまいます(笑)。

最近講師依頼が多く手が回らない状態ですが、特に女性会員は熱心な方が多く積極的に対応してくれます。また、女性会員の一人は、着なくなった和服を活用し避難時の「防災頭巾」を考案して作りました。なかなか使いの勝手がよく、評判を呼んでいます。

年に何回か自分たちで「避難所運営ゲーム」のような実技も含めた研修会も行ったりしています。事務的なことは、十勝振興局に

負うことが多いですね。

## 組織の取りまとめ

私は、百人いれば百通りの考えがあると思っていますので、代表として皆さんに何かの課題を出したら、その後はほとんど聞き役に徹しました。そうして、どんどん意見を出してもらうようにしました。

「ちよつと困難かな?」と思われる意見があっても、とりあえず賛成するようにしました。そして、あまり難しい話をしないで、楽しさを求めていくようにしました。私は、会員が誰でも自由に意見を述べることができる雰囲気が必要だと思えますし、それに対して幹事は耳を傾けて、決して権限を持って会員を制圧するようなことははならないと感じています。皆さんはどう思われますか。

## 参加してからの自分

私たちの「とかち防災マスターネットワーク」の主たる活動場所は、私が住む広尾町から85km離れているため、自家用車で片道1時間半かかります。

地元の広尾町と違って帯広圏では私を知らない人がほとんどだったので、とても気が楽でした。自分の過去の行動や発言を全く気にせず、本来、自分の底の底に持っている活発な性格や自由な発想、面白い提案



防災講習会では、各地域の防災マスターたちと意見交換を行うこともある

などが、引っ込み思案の私の心の下から顔を出して、行動し発言するので、自分自身がびっくりしていました。

### 組織編成での課題

設立当初は、話し合いで設立メンバー5人を同格の幹事としましたが、組織運営や対外的な面もあり代表幹事を1名置くことにして、私とその役を任せられました。縦割りの組織ではない横並びの組織で、上下関係も希薄で同格意識が溢れていましたので、仲良く運営できて楽しい団体でした。

しかし、年数を経て会員数が増えてくると、横並びの幹事では責任範囲があいまいなので、縦割りの部長制度を導入して業務を分散してみました。

ただ、これがまずかったのかも知れませんが、その後、組織内での軋轢を生む遠因となつたような気がしています。

す。というのも、部長制度の導入以降、ややギスギスしてきた感があるからです。このことは、読者の皆さんがこれから団体を新設される時の参考としていただければと思います。

「とかち防災マスターネットワーク」には多くの女性が参加しています。そして、参加している女性たちは本当に

行動的です。女性たちが生き生きと明るく活動してくれば、男性たちもつられて行動してくれます。ただ、時には女性同士の意見の食い違いや多少の対立もありました。そんな時は、「どちらの意見が、全体に支持される公平性や積極性があるか」などを考えるようにしていました（ほとんど同じなら年の差で決めましょうか）。

### ボランティアと限界集落について

私がこの活動を通じて感じたことは「ボランティアの精神や心構えは、限界集落の方々の気持ちと相通じるものがあるのではないか」ということです。

私の住む広尾町の南端に「音調津おしらべつ」という150戸ほどの集落があります。ここは、幼稚園・保育所も小・中学校もない、お年寄りばかりと言つていいような町内会です。

しかし「自主防災組織としては、もしかして北海道で一番頑張っている地域ではないか」と私は感じています。町内会長の下に結束がありますし、避難訓練も実践的にするため、役所にも地域住民にも知らせず、いきなり抜き打ちで行うそうです。びつくりですね!! もちろん、日常生活や避難訓練に支障のある病気などを持つ人は、幹事に申し出てほしいと伝えていきます。

全国的に、高齢化した集落の希望なき問題点ばかりがクローズアップされています。

ますが、高齢化した集落は地方自治の原点でもあり、助け合いの精神を教えられる、一筋の光がある場所とすら思えます。

### おわりに

今まで、私たちの団体は会費もなく、公的補助金もなく過ごしてきました。経費発生の事態が起これば、その時々の方で、皆さんに大きな負担をかけないように配慮しつつ、たまに少しだけ負担をいただくなどして活動してきました。この間、経費負担が少なかったため、不公平感を感じることもなく皆さんに参加いただけたのではないかと思います。

発足から10年目を迎え、現在は参加人数も講師依頼の件数も増えてきました。これからは公平感を持続でき、事業の効果もあるようなやり方をさらに検討する時期かと感じています。

災害時は「地域力」地域の人々がどう行動するか」が大きな力となり、その違いが災害後の差を生み出していくものと感じていきます。特にシニアと女性の知識と行動力、協調性は、地域力として災害に立ち向かう大きな力となります。ご自分の地域、またはどこか活動しやすい他の地域、あるいは被災された地域でもいいと思います。どうか皆さまのお力を傾けて、それらの地域の方々に喜ばれ、ご自分自身も再び自信を持つて歩んでください。